

人間の暮らしの本質、人とのつながり

さて、中面では吉岡さんの活動の一端をご紹介しましたが、吉岡さんご本人から伺ったこれからの活動への思いをお伝えします。

「今の農業は機械ですぐやるが、昔は本当に大変だった」

「昔から脈々と変わらずやってきたことが、昭和30年後半から変わってきた。暮らしが味気ないようになった」

「今までわしらがやってきたことは何だったのかと思う。今だからこそ、後世に伝えるため絵や紙芝居をして残したい。そうしないと昔の苦勞が忘れ去られてしまう」

「これは自分にしかできないことだと思っている」…など。

いろんな思いを語っていただく中で、印象に残る場面があります。

それは、牛（農耕牛）を苦勞させたというエピソード。

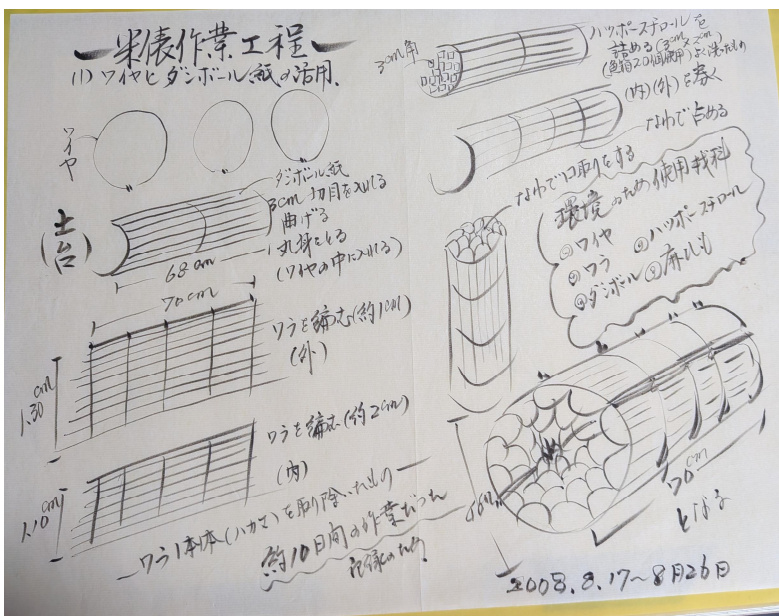
「春になるとみんなで牛をこき使いあげた。牛が用水路の穴に落ち込んで、何人かで助け上げたがあれはかわいそうだった」と。時折涙ぐまれて語る吉岡さんに、こちらもちらい泣きしようになりました。



吉岡さんの活動は単に昔を掘り起こすことではありません。

それは今を生きる私たちに、当時の暮らしの中で大切にしてきたことは何かを考えること。そして忘れ去られようとしていること、なくなってしまったことの中に、人間の暮らしの本質を見出すようなきっかけを与えてくれることです。

「モノは豊かになったかもしれないが、人のつながりが薄れてきて、共同体としての動きがなくなった。昔はみんなと協力しないとコメ作りができなかったし、だからこそ隣近所と仲良くするようにしていた」と語る吉岡さんですが、最後にこうも語ってくれました。「今さら昔のやり方に戻れるわけではないが、新たなやり方で人とのつながりの大切さを取り戻してほしい」と。



最後に…

今回、吉岡さんは実名と写真の掲載を快諾してくださいました。それは、今回の記事で自分を思い出してくれる昔の仲間がいたとしたら嬉しい、という理由です。取りも直さず、それは、人とのつながりを大切にしたいという吉岡さんの思いからなのです。

編集後記 『吉和がうまれた日』の紙芝居が上映された「あつまろう家」の語源も吉岡さんだと知り、この特集は必然だったと思いました。たくさんの宝物を見せていただき、心から感謝しています。

包括さいき通信

発行元 廿日市市地域包括支援センターさいき

廿日市市津田 1989 番地 佐伯支所内

☎ 0829-72-2828 営業時間 8:30~17:15 (土日祝休) 第 6 号 (令和8年8月)

「はつポ」を始めてみませんか？



今年春から開始された「はつポ」、皆さんはご存じですか？

廿日市市に住民登録がある65歳以上の方で、スマートフォン・タブレットをお持ちの方がアプリを活用して、健康づくり（散歩、脳トレゲーム、食事の記録）、百歳体操などの参加、またボランティア活動を通してポイントを貯めることができます。 ※PayPay ポイントへ交換（100pt=100円）

「脳にいいアプリ」をダウンロードし、アカウント登録・はつポの申し込みが必要です。興味のある方はお気軽に支所などへお問合せください♪

歩く



脳トレ



食事



廿日市市のポイント制度でボランティア活動を促進！

廿らっプラチナボランティア

ボランティアポイント対象団体はこちらから▶



以下のような市が指定する廿らっプラチナボランティアの活動を行うことで「はつポ」のポイントが獲得できます。

● 介護施設等でのボランティア活動 レクリエーション補助、話し相手、見守り、食事準備、お茶だし、趣味や特技の披露、掃除、洗濯等のボランティアを介護施設等で実施している人。	● 介護予防普及啓発活動 健康づくり応援団やウォーキングリーダーとして、健康づくりの普及啓発活動をしている人。
● 廿らっサロン・百歳体操でのお世話活動 廿らっサロンや百歳体操内での行事活動、レクリエーション、会場準備、見守り、料理の手伝い、お茶だし等参加者と一緒に楽しく世話人活動をしている人。	● 食生活改善推進・食育の普及啓発活動 食生活改善推進員として料理教室や講習会などを実施して、地域で食育、栄養改善活動をしている人。
● 地域の見守り活動（立哨） 登下校の見守り活動を基本としながら地域の中での見守り活動や高齢者等に対するあいさつ・声かけを実施している人。	● 認知症カフェでのボランティア活動 認知症カフェで、参加者の見守りや活動補助をしている人。

吉和をもっと知りたい ～ 佐伯・吉和のキラリ人拡大版 ～

今回ご紹介するキラリ人は、

りかお
吉岡 利賀夫さん（89歳）

吉和生まれの吉和育ち、生粋の吉和っ子として吉和村（当時）役場の職員となり、主に住民福祉や産業振興に携わり定年まで勤め上げられました。退職後は地域支援サポーターのまとめ役や吉和小・中学校全学年9クラスに書道を教えたり、元々手先がとても器用で、モノづくり教室「創ろう屋」を主宰したり、自宅には工房もありました。



『生まれ育った懐かしき自宅』（模型作品）

茅葺き屋根、ネコのいる縁側には柿が干してあり、水車、飼育していた動物たち…外観だけでなく、内部まで忠実に再現されています。



『そば打ち教室』開催

そば打ちはテレビ番組「満点ママ」にも取り上げられて、教えを乞う人がひっきりなしだったそうです。吉岡さんが様々な方面で才能を発揮されていたことが分かります。

ここで、地域に根ざした吉岡さんのこれまでの活動を振り返ってみます。

『花まつりの白いゾウ』

右の写真は竹で骨組みを組んだゾウの像です。お釈迦様の仏像が背中に乗っています。

今は中津谷地区にある専立寺に置いてありますが、綱で引っ張って動かせるように作られています。吉岡さんは自宅の工房で組み立てたのですが、思いのほか大きくなったために工房から出せなかったそうです。そのため急遽サイズを変更して外へ出したのだと専立寺の住職、能島さんが話してくれました。実際にお寺の年中行事『花まつり』で活躍しており、子供たちが引いて地区を歩きながら回ります。



『吉和がうまれた日』（紙芝居作品）

多才な吉岡さんは絵も堪能です。ここ数年はかつての吉和のコメ作り、昔話、昭和 30 年代前半の街並みを紙芝居にしています。「昔のコメ作り」の紙芝居は丹念に描かれた当時の農具、人物、農耕馬などを通して、当時の吉和の暮らしまでもが伝わってくる内容となっています。

「吉和がうまれた日」では、里の上に住む「吉蔵」さんと、下に住む「和助」さんが出会って「吉和」という名前をつけたというストーリーが、温かいタッチで描かれています。



「昭和 30 年代前半の街並みの絵」では、賑わっていた当時の吉和が丹念に描かれています。

今では想像がつきませんが、当時は旅館やパチンコ屋さんが何軒もあって、賑わっていたことが分かります。

吉和村誌を紐解くと、吉和は周防（山口県）、岩見（島根県）、戸河内、筒賀、佐伯町、湯来町に隣接する交易・交通の要地であり、これらに通ずる公道街道が多く、村内の小道もよく発達していたとあります。そして昔から反物や家具類の売買、富山の薬売り、魚売り、旅芸人や占い師などが泊まりがけで行き交っていたとの記述もあります。村の人口をみると昭和 20 年には 3,101 人を数え、昭和 30 年には 2,543 人となっています。

紙芝居は専立寺の住職、能島さんと二人三脚で地域の集いなどで上演されています。能島さんは脚本を書いたり、吉岡さんの紙芝居を画像データ化してスクリーンで上演できるようにし、語り手を務めます。能島さんの語り、そして当時を実際に知る立場から吉岡さんがコメントを入れながらの進行は好評で、高齢の方は当時を思い出して同じ年代の方との話が弾み、当時を知らない世代からは驚きの声が上がります。これらの紙芝居は、吉和小学校の授業でも上演が計画されているそうです。



